11th International Digital Curation Conference

参加報告書

日時：2016 年 2 月 22 日～25 日
場所：オランダ　アムステルダム　Mövenpick Hotel
参加者：南山泰之（情報・システム研究機構国立極地研究所）

会議のページ：
http://www.dcc.ac.uk/events/idcc16

第 11 回目の開催となる International Digital Curation Conference (IDCC) は、オランダ・アムステルダムで開催された。"Visible data, invisible infrastructure"が今年のテーマであり、研究データ管理のうち特にインフラに焦点が当てられている。昨今の主要テーマである研究データ管理に関する最新の動向把握、及び日本での取り組みを海外に発信することを目的として、機関リポジトリ推進委員会からは南山協力員（情報・システム研究機構国立極地研究所）が参加した。以下、会議の概要を報告する。

◇22 日：1 日目
1 日目は本体会議とは別との位置づけであり、関連する各種ワークショップが開催されていた。南山は”Workshop 5: Jisc research data management shared service pilot”に参加した。

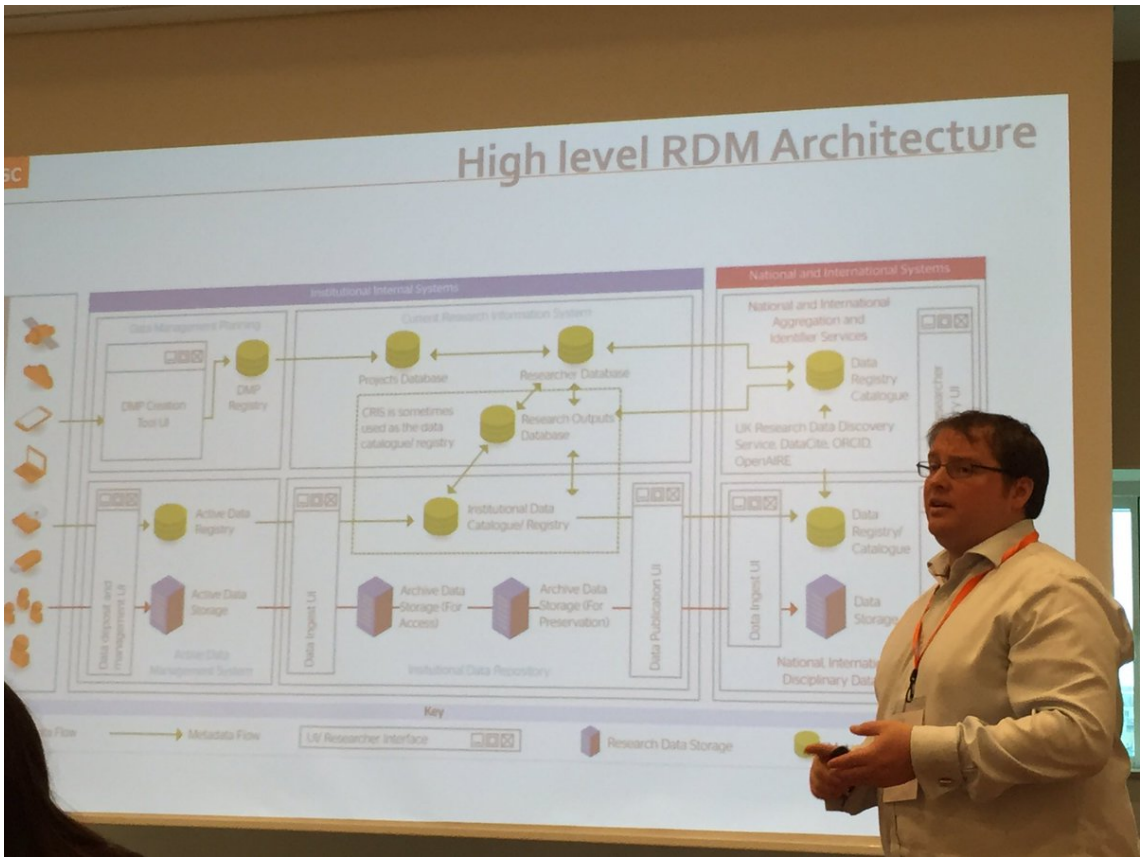
（WS の目的）
本 WS では、Jisc（英国情報システム合同委員会）が新たに始める研究データ管理サービスプロジェクトにつき、メンバーのみならず外部参加者とのディスカッションを通して問題点を洗い出し、理解を深めることを目的としている。事前に設定された課題としては以下の 8 つ。

Lot 1: Research data repositories
Lot 2: Repository interfaces
Lot 3: Research data exchange interface
Lot 4: Research information and administration systems integrations
Lot 5: Research data preservation platforms
Lot 6: Research data preservation tools development
Lot 7: Research data reporting

Lot 8: User experience enhancements

各々のテーマにつき、大学横断的にインフラやサービスを共有できる点を探るために、現状の分析、到達点の確認、本プロジェクトに期待すること、等が各報告者から紹介された。また、議論の前提条件として、①Jisc が果たす役割の確認（問題の把握と good practice の提供)、②研究者に対する視点（インフラを意識せず可能な限り簡単にサービスを享受できるように)、③ビジネスモデルとして成立させること、が共有され、各班ごとにディスカッションを行った。なお、配布資料については別添２を参照されたい。

（図：研究データ管理のためのアーキテクチャ）



（参考：当日紹介されたウェブサイト）

・Jisc. Research data and related topics.
http://researchdata.jiscinvolve.org/wp/2015/10/07/jisc-rdm-shared-service-pilot/

・University of Cambridge. Research Data Management website.
http://www.data.cam.ac.uk/

・University of York. Borthwick Institute for Archives
http://www.york.ac.uk/borthwick/

◇23 日：2 日目
2 日目は本会議が開催され、基調講演、パネルディスカッションのほか、ポスター発表（Minute Madness Session も含む）及びデモ等で賑わった。日本からは機関リポジトリ推進委員会によるポスター発表のみの出展ではあったが、アジア圏からは日本のみの出展であり、一定のプレゼンスは示せたものと思われる。講演については以下に資料が公開されているため、リンク先を参照いただきたい：

09:40 – 10:25　“Science as a social machine”. Barend Mons
http://www.dcc.ac.uk/sites/default/files/documents/IDCC16/Keynotes/Barend%20Mons.pdf

11:00 – 11:30　“Strategies for improving openness and reproducibility”. Andrew Sallans
http://www.dcc.ac.uk/sites/default/files/documents/IDCC16/Keynotes/Andrew%20Sallans%20Day%201.pdf
（参考）Open Science Framework：https://osf.io/

・ポスター発表資料
（全体）http://www.dcc.ac.uk/events/idcc16/posters
（機関リポジトリ推進委員会作成のポスター）
http://www.dcc.ac.uk/sites/default/files/documents/IDCC16/77_oepnscience_rdm.pdf

◇24 日：3 日目

2 日目に引き続き、3 日目も本会議が開催された。3 日目はテーマごとに 3 グループに分かれ発表があったため、南山は下記に参加した。以下、参加した発表ごとに簡単な紹介と参照先を記す。

10:00 – 11:00　A1: Social science data practices

・A Report of Data Intensive Capability Institutional Support and Data Management Practices in Social Sciences. Wei Jeng

社会科学分野のデータにつき、研究者へのアンケートを通じてその実態を把握し、アンケート結果の分析からサポートの手法を探る取り組みの紹介。

（参考）http://communitymodel.sharepoint.com/Pages/default.aspx

・Factors influencing research data reuse in social sciences. An exploratory study. Renata Curty

社会科学分野において、データの再利用に影響を与える要素は何か、を考察。

11:30 – 11:50　C2: Citation and persistent IDs

・Formalizing an Attribution Framework for Scientific Data/Software Products & Collections. Chung-Yi Hou

Attribution and Acknowledgment Content Framework (AACF) project の紹介。研究データの帰属先、取得の際の寄与者を適切に記述するためのメタデータフレームワーク構築を検討している。

（参考）https://www.ideals.illinois.edu/handle/2142/88845

11:50 – 12:30　B2: Metadata and provenance to support data reuse

・Using metadata actively. Colin Bird

CREAM (Collaboration for research enhancement by active use of metadata) project の紹介。メタデータ生成プロセスに着目し、プロセス自体も再利用可能な状態に置くことを目標としている。

（参考）https://blog.soton.ac.uk/cream/

・Provenance in support of ANDS' four transformations

ANDS (Australian National Data Service) の体制やプロジェクトの紹介。1) managed 2) connected 3) discoverable 4) reusable の観点から研究データの管理体制を考える、という点が特に強調されていた。

（参考）http://ands.org.au/

13:30 – 13:50　B3: Digital Preservation

・Developing a Data Vault. Stuart Lewis

2014 年の図書館総合展で University of Edinburgh の Stuart Lewis 氏が紹介されていた、'JISC Data Vault'システムの紹介。アーカイブ用のリポジトリと active なデータを扱う共有フォルダを繋ぐ役割を果たす。

（参考）http://libraryblogs.is.ed.ac.uk/jiscdatavault/

14:10 – 14:30　A3: Research data services

・Taking the IR to the Cloud – developing figshare for Institutions at Monash. Mark Hahnel & David Groenewegen

Monash University と figshare の連携事例の紹介。バックエンドを figshare が担当し、既にある Monash University の機関リポジトリを公開用にしている。

（参考）https://monash.figshare.com/

https://figshare.com/blog/Monash_University_and_figshare_partner_to_combine_cloud_management_and_discovera/137

テーマごとの発表後、research paper 及び poster の表彰があり、盛会のうちに閉会した。

◇25 日：4 日目

4 日目は 1 日目同様関連ワークショップが開催されており、南山は"Workshop 10: Metadata in action"に参加した。

（WS の目的）

WS では、行動の中からどのようなメタデータが抽出できるのかを実習することを目的として、2 つの実験を行った：

① ボール紙

ボール紙で作られた円錐上の筒（音を拡大できるようになっている）を各々持参し、会場内で聞こえた音をメタデータとして文字に起こす実習（録音した動物の声を流す、といった仕掛けがいくつかある）。同じ条件であっても、参加者が付与したメタデータにいくつかの違いが見られ、経験や文脈による差がある、ということを理解するためのもの、との説明があった。

② LEGO ブロック

LEGO ブロックで車を作り、後部に薬品を入れたプラスチック容器を設置して、一定時間後に蓋が飛ぶような仕掛けを作った上で距離や時間を測る実習。特にメタデータ標準を与えられずに実習を行った結果、グループによって様々なメタデータのとり方（重さ、速さ、サイズ、薬品の量等）が確認された。

WS 内では明確に言及がなかったものの、多様になるメタデータをどのように利活用するの

か、という点が、主催者が現在取り組んでいる CREAM project の主目的かと思われ、実感を共有することが本 WS の狙いであったと推察される。なお、CREAM prject の詳細は以下の Web サイトを確認されたい。

https://blog.soton.ac.uk/cream/

（所感）

本会議ではインフラの構築がメインテーマであり、当然ながら諸国における研究データ管理のためのインフラ整備の事例が数多く発表されていたものの、データ公開に対する取組みよりも非公開部分をどう管理するか、という点にかなりの比重が置かれていることが印象的であった。管理ツールとしては OSF (Open Science Framework)、Jisc DataVault などの大学・助成機関による取組みのほか、Monash University / figshare のような企業との協働の取組みなども紹介され、組織的に着々とインフラ整備を進めている様子が窺える。また、機動的な整備の背景にある柔軟なマネジメントの存在は、日本との大きな違いに思われる。大掛かりな予算でプロジェクトを動かしている面もあるものの、研究データ管理体制構築に当たり、ビジョンを共有し、広報担当、システム担当などの役割分担を明確に定義した上で、役割に適した人材を配置する裁量を持つ責任者の存在はやはり大きい。

発表を通じては、(研究データに限らず) 諸外国と比べ日本の取組みとして発表できるコンテンツが少ないことに大きな危惧を抱いた。諸外国と競う必要性は（あくまで個人的には）あまり感じられないものの、今後日本からの情報発信面を強化していく上では、日本の事情を踏まえた構想、あるいは特徴的な取組みなどを見出す必要がある。大学図書館業界の立場からは、

1) 研究データ管理のビジョンやポリシーの必要性を周知し、あるいは作成のための議論に積極的に参画すること
2) （前提として）関係者間、特にまず大学図書館業界内でビジョン実現に向けた現状把握（既存のシステムと人材でどこまでカバーできるのか）と意識の共有を行うこと

が喫緊の課題に思われる。さらに、「機関リポジトリ」を推進する観点からは、

3) 実現までのロードマップ作成に当たり、機関リポジトリがシステムとしてできること、あるいは現在の機関リポジトリの担い手である図書系職員が運用としてできることを明確に打ち出すこと

も重要となろう。継続的な情報収集に加え、日本の環境でどう扱うか、を幅広く議論し共有する場が今後求められるように思われる。

以上